

2015年度

Women@JAXA

総集編



宇宙航空の未来を拓く女性たち

ロールモデル集



JAXA全体の 働き方の改善、 新しい働き方に つなげるために

JAXA 理事長
奥村 直樹



男女共同参画推進室を設置して1年半が経ちました。今年度は文部科学省からの補助金を得て実施中の女性研究者研究活動支援事業の最終年度であり、設定した目標が達成できるかどうか、これまで以上に努力することが求められる重要な1年となります。男女共同参画推進室の構成員だけでなく、全社を挙げてこの取り組みを強力に進めることをお願いしたいと思います。

私は、この活動は今年度限りの一過性のものでなく、事業終了後も女性だけでなくJAXA全体の働き方の改善、新しい働き方に繋がるような取り組みとして継続させていければと考えています。国立研究開発法人として国家の技術を支える立場のJAXAが、研究だけでなく働き方の改善にも力を入れていることは、関係機関のみならず国内外に良い影響を与えます。

私自身の経験からも、長時間労働は必ずしも生産性の高い働き方とは言えないと思っています。全ての職場においてワーク・ライフ・バランスを追究し、子育てや介護期にある職員でも安心して働けるような職場環境作りを行うことで、全職員の働き方が改善され、より効率良く高い成果を生み出せる組織となります。そのため、職員一人一人の意識の改革が必要です。

男女共同参画推進室の取り組みは、まだ、一部の職員の活動に留まっていると感じます。今年度はより広くJAXA内部でのコミュニケーションを図り、全社的な活動として男女共同参画や働き方の改善が推進されることを期待しています。

JAXA男女共同参画推進室とは

P.2

2013年10月に設立されたJAXA男女共同参画推進室の活動についてご紹介いたします。

ロールモデル紹介

P.3~14

JAXAの女性職員に自身の経験や考えを聞きました。仕事を続ける上でのモチベーションや、ライフ・ワーク・バランスの取り方は人それぞれです。宇宙航空の現場で頑張る女性たちの話が少しでも読者の参考になればと考えています。



宇宙科学研究所
航法・誘導・制御グループ
主任開発員
廣瀬 史子
P.3



宇宙教育推進室
計画マネージャ
佐々木 薫
P.4



第一宇宙技術部門
地球観測研究センター (EORC)
研究領域リーダー
沖 理子
P.5



宇宙科学研究所
太陽系科学研究系
准教授
松岡 彩子
P.6



宇宙科学研究所
太陽系科学研究系
助教
大竹 真紀子
P.7



研究開発部門
第4研究ユニット
研究員
川邊 泉
P.8



航空技術部門
事業推進部
参事
阿部 玲子
P.9



広報部
主任
岩木 環
P.10



第一宇宙技術部門
事業推進部
主任
中村 祐子
P.11



衛星開発プロジェクトチーム
主任開発員
萩原 明早香
P.12



調査国際部
国際課
主任
落合 美佳
P.13



衛星開発プロジェクトチーム
開発員
市川 千秋
P.14

JAXA男女共同参画推進室の取り組みの紹介

P.15

「女性研究者研究活動支援事業(一般型)」のJAXAでの取り組みについてご紹介いたします。

JAXA男女共同参画推進室とは

文部科学省が実施する「女性研究者研究活動支援事業」の選定機関として、JAXAは平成25(2013)年10月より男女共同参画推進室を設置し、職員の子育て・介護期の支援、ライフイベントを原因とする離職防止、ワーク・ライフ・バランスの確保や能力発揮等に取り組んできました。

多様性・創造性の向上はイノベーション推進の鍵であり、男女共同参画と人材活用はこの目的に資するものです。マネジメント力、リーダーシップの発揮を含めた女性自身の能力の向上と共に、働きやすい環境の整備を行い、宇宙航空分野の発展に貢献したいと考えています。

女性が少ないと言われる宇宙航空分野ですが、JAXAは女性の宇宙飛行士、宇宙航空分野で先端的な研究を行う研究者、宇宙機のフライトディレクター、ロケット発射指揮者等を輩出してきました。これらの女性研究者(研究員・開発員・教員)は近年増加していますが、航空宇宙分野を志す女性の絶対数が元々少ないこともあり、まだまだ少数です。さらにJAXAにおける上位職階の女性割合も非常に少ない状況です。平成27(2015)年4月時点の女性研究者の在職比率は10.9%、採用比率は11.5%ですが、これらの数値を補助事業期間終了後の平成28(2016)年3月末には12%以上、18%以上にする目標を掲げて参りました。また、女性活躍推進法に基づく新たな数値目標の設定にも鋭意取り組んでおります。

宇宙航空分野で働くJAXAの女性たちの等身大の日々の生活、夢、悩みを知っていただくことで、理解を増進し、効果的な取り組みを行う一助とすると共に、この分野を目指す若い世代が増えることを願っております。

当室はこのような取り組みを女性研究者のみでなく事務系職員や男性職員も対象とすることで、職場の活性化を目指してきました。「女性研究者研究活動支援事業」は平成27(2015)年度で最終年度を迎えますが、一人一人の職員が、働きやすい職場でやりがいを感じ、能力を発揮できるような取組みはさらに発展した形で続きます。今後ともJAXAの取組みを見守っていただき、ご指導賜りたくどうぞよろしくお願い申し上げます。

男女共同参画推進室長 杉田尚子



女性研究者のためのグローバルメンタリング研修(平成27(2015)年11月16日)

[ABOUT WORK]

自分の仕事を宝物にするために

宇宙科学研究所 航法・誘導・制御グループ 主任開発員

廣瀬 史子

JAXA第一期生として入社し、筑波宇宙センターに配属。5年間スペースアプリの観測や解析に情熱を傾ける。次に異動するなら意外な所が良いと希望していたところ、宇宙科学研究所に異動。職員数が最も多い筑波宇宙センター内で自分はずっと過ごすだろうと潜在的に思っていたため、確かに意外な異動先となった。子どもの頃から深宇宙に興味があったので、金星探査機「あかつき」に関わり始める。その後、「あかつき」が思わぬ事故に遭遇し、再び金星周回軌道に入れるべく、精魂を込めて軌道再設計に取り組んだ。

OB訪問を受けると、学生さんからよく「仕事をしていて大変と思う事は何か」と聞かれるが、趣味の延長で仕事をしている気がして、あまり大変と思わなかったことがない。また、自分が手を動かしたことが、「誰か」や「何か」の役に立つならば、苦勞も吹き飛んで、自分の宝物になる。そのためにも、自分はこの人生で何がしたいのか、を学生の時に真剣に、深く考えることは重要と感じる。

学生時代にアンテナを張り巡らせてさまざまな経験を積んだ。当時は大学外のことにも一生懸命に

なつて、学生時代にもう少ししっかり勉強すれば良かったと後悔することもあるが、今から取り戻すのも遅くないかな!?と思いつき、最近密かに大学に再び通っている。

[ABOUT LIFE]

子育てと仕事の両立は大変なことだと実感

仕事で大変と思うことはないが、やはり子育てと仕事の両方を存分にこなすのは、本当に大変だとつくづく思う。先輩ママ職員さんのすごさを改めて実感する。

一番申し訳ないなと思っていることは、子どもの食事が7割方手抜きなところ。何でも食べてくれる娘に感謝しつつ、実は手抜き料理の時に「おいしい!」ありがとと頭を下げながら言ってくれる1歳児を見ると、「どういたしまして」と応えながらも後ろめたい気持ちになる。

週末に料理して冷凍するなりすれば効率が良いのだと思うが、手抜き料理となる。仕事で忙しい時なので、そんな時は時間構わずパソコンを広げたりして、なかなかそうもいかない。いやー、これは本当に大変なことだと、と実感する毎日である。

[HOW TO OVERCOME]

皆の協力を無駄にせず期待に応えて行きたい

そんな中、やはり感謝するのは、夫や上司、同僚や、両親のサポートである。皆のサポートなしでは、自分だけで子育てと仕事を納得するまで行うのは本当に不可能だと思つた。

例えば、夫には保育園の迎えを突然代わってもらったり、上司には時間を融通してもらったり、休まねばならぬ時に資料の説明をお願いしたり、同僚に手をおかしてもらったり、実家の母に子守をお願いしたり。感謝することとは山ほどあつて、してもしきれない

くらい。皆の協力を無駄にしないために、自身も皆の期待に応えて行くこと。これを心がけて仕事にも打ち込んでいく。

だが、「ワーク・ライフ・バランス」というと一般的には、仕事・育児・趣味の3つを指すことが多い。この記事のプロファイルの中で「趣味」を書く欄があつて、ふと、最近、自分に趣味が無いことに気づいた。

強いて言えば、子どもと一緒に「トーマス機関車」の番組を見ることとが趣味かな。何とも情けない趣味で、ほかに捻り出すとしたら、懐石料理を習っていることくらい。…と考える。だが懐石料理はだんだん習っているだけで、後輩から食べてみたいと言われつつも、料理を出せる和器がないという意味の分からない理由をつけて、断り続けている。自分が懐石料理を習っているのは、日本文化に興味があるからで、料理が好きなのではないのだ、と、ここでも言い訳をしておこう。美味しい料理が食べられること、魚の構造に詳しくなること、JAXA外の女子たちと女子トークを繰り広げることのために、料理教室の先生に「違う!」などと毎回怒られるながらも楽しく通っている。この年になると怒られることも少ないのになら、貴重な経験である。日々精進。いつか怒られないようになると、そろそろ本気で頑張らねば、である。

強い言葉で、子どもと一緒に「トーマス機関車」の番組を見ることとが趣味かな。何とも情けない趣味で、ほかに捻り出すとしたら、懐石料理を習っていることくらい。…と考える。だが懐石料理はだんだん習っているだけで、後輩から食べてみたいと言われつつも、料理を出せる和器がないという意味の分からない理由をつけて、断り続けている。自分が懐石料理を習っているのは、日本文化に興味があるからで、料理が好きなのではないのだ、と、ここでも言い訳をしておこう。美味しい料理が食べられること、魚の構造に詳しくなること、JAXA外の女子たちと女子トークを繰り広げることのために、料理教室の先生に「違う!」などと毎回怒られるながらも楽しく通っている。この年になると怒られることも少ないのになら、貴重な経験である。日々精進。いつか怒られないようになると、そろそろ本気で頑張らねば、である。

[FOR THE FUTURE]

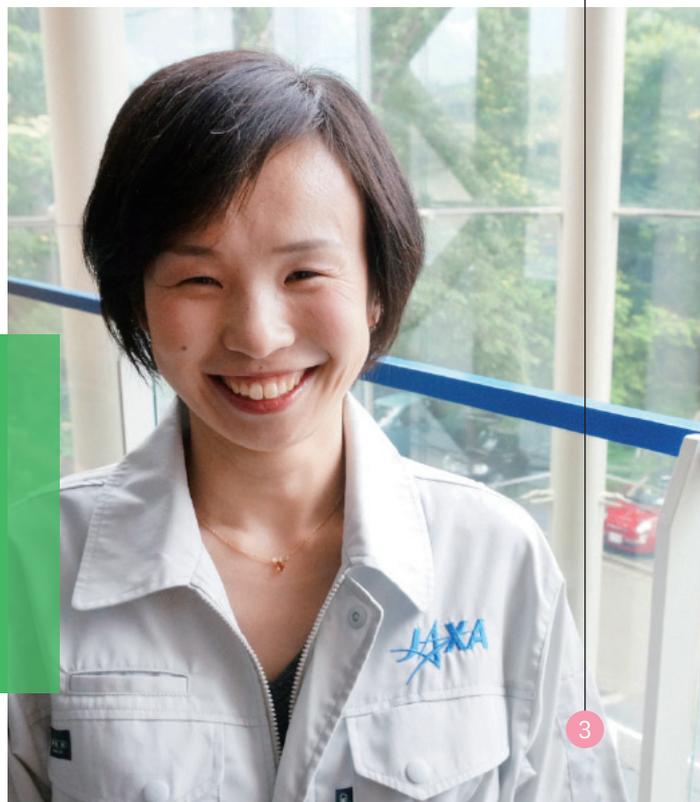
プロジェクトの糧となる技術を獲得したい

将来の夢は、やはり自分がやりたいと思つたプロジェクトの開発を確実に実行する。そのために、今から将来の準備をせ

ねばと思つているが、今は「あかつき」の金星周回軌道投入に向けた机上解析や運用準備に手一杯で、何もできていない。

宇宙研に来て、「昔は実験を繰り返しながら、改良を繰り返して、それで実機を組み立てた。今は数値シミュレーションをして実機を作れば、それで上手く行くと思つている」と話す先輩方に遭遇する。今も毎日実験を繰り返して、改良を続けている同僚や少し上の先輩方ももちろんいるが、私はまだ自分でそういう実験を企画し、実行したことがない。これまでは解析寄りのエンジニアだったが、メカニク的な面も含んだ研究を実行し、将来プロジェクトの糧となる技術を獲得したい。

子育てと仕事の両立は、自分の想像以上に大変だった。だが、娘を見ながら、この子は理系っぽいなあ、とか将来何に興味を持つのかな、と考えるのはやっぱり楽しい。毎日一緒に頑張ろうね!と自分にも言い聞かせながら、日々を乗り切つていくところである。



Profile

- 【入社年度】2004年度 【雇用形態】常勤 【勤務地】相模原
- 【略歴】お茶の水女子大学大学院 博士課程前期修了(物理科学コース)
- 【出身地】大阪・千葉・埼玉
- 【趣味】最近無い! 気になります...
- 【家族構成】夫、子ども1人(長女1歳)

[ABOUT WORK]

何事も経験と割り切り 前向きに取り組む

佐々木 薫

宇宙教育推進室 計画マネージャー

準備不足であちこち振られるも何とか進学。まったくもってマイペースである。

大学では、政治、行政、法律、特に国際公法を勉強。その一方で、市の科学館の天文ボランティアを卒業まで続けた。社会教育活動の一環で、望遠鏡をトラックで積んで市内のあちこちの団体（小学校や公民館など）をまわり、その地域の親子たちと星の観望をする活動をした。地域の大学の学生など、そこで出会ったボランティア仲間とは、今も繋がっている。卒業後の進路は、漠然と産学官なら官かなあと思い、公務員をメインに考えた。

NASDAが初めて宇宙飛行士を採用したニュースに接して、日本に宇宙開発を行う国の機関があることを認識したが、自分に関係するとは思わず。公務員試験系の雑誌でNASDAが事務系も含めて職員を募集しているという情報を見て、記念的に受けてみようと思った。私の周りではそれ何？「NASDAの支店？」という反応ばかりで、地方公務員を蹴ってNASDAにしたと言った時、家族や学部の友人はみな驚いていた。ボランティア仲間は、マニアックなところにしたなーと言っていた。

社会人は理不尽な仕事も多いと聞いていたが、総じて良いことの方が多かった。特に20代は、何事も経験と割り切って前向きに取り組むことができた。上司や仲間にも恵まれ、生みの苦しみはあるがその先の喜びに必要なプロセスという感じであった。ちょうど30歳の時、海外研修の経験をさせてもらい、視野が本当に広がった。これもよい経験。

だいたい3年ごとにさまざまな部署を経験したが、そのたびにその部署特異の見方、考え方があることを学び、また、社内外のいろいろな方たちと仕事を進めることで経験を積んできた。いずれも総じて

良いことが多かったように思う。

[ABOUT LIFE]

女性だから不利と 仕事で感じたことはない

現在、実家が相模原キャンパスに比較的近いところにあり、まだ介護とまではいかないが後期高齢者となった両親がいるため、困ったことやトラブルがないか、たまに様子を見に行く。電話ではなく直接行くことで気がつくこともあるので、実家が近くにあるに幸せている。

趣味で、健康維持（メンタルも含めて）を目的に、テニスやランニング、山歩きなどアウトドア活動を続けている。目下の目標はフルマラソンを途中歩かずに完走すること。

これまで、仕事上で女性であるということに対して、明らか不利を感じたことはない。感じていないだけかもしれないし、周囲の皆さんの気遣いなどによるだけなのかもしれない。得したことについても同じように思う。女性だから得したと感じたことはない。

[HOW TO OVERCOME]

大切なのは、いつも 心身共に健康であること

ワークライフバランスで気をつけていることは、いつも心身ともに健康であること。もちろん日によっては風邪をひいたり、怪我をしたりということもあるが、重症化させない。早くリハビリするために、食事や運動などその人に合った方法でよいので、普段から健康を意識して管理することが大切である。

また、仕事上の目標だけでなくプライベートでも目標を持つことが、健康維持のモチベーションになると考える。目標は公私ともに、与えられた目標だけでなく自分で設定する、自分のための目標も必要と考えている。所属部署の皆さんもそういう心構えで

日々過ごしてくれればと思いつながら、仕事している。

私のストレス解消法は運動である。余計なことを考えずに体が疲れるというのが良いのではないかとと思う。美味しいものを食べたり（呑んだり）、旅先で触れる自然や景色などにも癒される。

現在の職場では、部署内の職員皆さんがお互い何でも相談でき、また、休暇を取りやすい雰囲気づくりを心掛けている。年度目標、四半期の目標などを明確化し、室内で共有。各人がそのために今月、今週、今日、何をすべきか分かりやすい状況になれば、計画的に休みも取得しやすいのではと思う。日頃からお互い仕事上の連携や協力など相談できると、新しい手法を思いつき、効率化にもつながると期待する。また、急に休みを取らなければならない状況が発生しても、事情は人それぞれ、お互い様という気持ちを持てればと思う。

[FOR THE FUTURE]

自分が何をしたいのか、 主体的に行動してほしい

次代を担う人たちには、性別に関係なく人間としてこうあるべきという姿を描いて、それを指標にいろいろな事を考え行動に移してほしいと思う。世の中には、変わっていきもの（変えていくべきもの）と、普遍的なもの（変えずに残していくべきもの）の両方があると思うので、自分が何をどう思うか、考えて実行してくれることを期待する。積極的に動くでも、自立動きはなくてもドーンと構えている感じでもそれはどちらでもいいと思う。

宇宙活動は人類に、宇宙から地球を見る、あるいは地球を宇宙の一部として見るという視座をもたらしてくれた。わずか55年程前に手に入れた視点だけれども、それによつてずいぶん世の中の考え方も変わつていったのではないかと。これからも宇宙活動は世の中に影響を及ぼすキーエレメントの一つであり続けるのではないかとと思う。皆さんもそういう視点から、これからの自分の生き方と社会への関与のなど主体的に考えて行動してほしい。



Profile

【入社年度】1989年度 【雇用形態】常勤 【勤務地】相模原

【略歴】北海道大学法学部卒業、国際宇宙大学修士課程修了。宇宙開発事業団入社後、広報業務・国際調整業務を主として歴任。

【出身地】親の転勤にともない盛岡で生まれ、仙台、世田谷で育つ。

【趣味】テニスやランニング、山歩きなどアウトドア活動

[ABOUT WORK]

世界から一目おかれる仕事に喜びを感じて

第一宇宙技術部門 地球観測研究センター(EORC) 研究領域リーダー

沖理子

子どもの頃から好きだった地球科学を大学、大学院と専攻し、大学院博士課程での指導教官が熱帯降雨観測計画(TRMM)に関わっていたのがきっかけで、それをテーマに博士論文を書いた。TRMMはNASAとの国際共同プロジェクトだったこともあり、論文は日本よりもむしろ米国で注目され、世界をみた。人よりも余計に時間をかけて学位を取得した当時、NASAは学位取得者を新卒では採らないということだったので、RESEARCHに就職した。

その後、学振海外特別研究員になった夫と同時期に、周囲の寛大な措置のおかげでNASAゴダード宇宙飛行センター(GSFC)に研究員として行かせていただき、TRMMの研究に従事した。1997年秋に帰国して、TRMMの打ち上げを迎え、その年の中途採用でNASAに採用していただいた。

JAXAでは地球観測研究センターでTRMMのデータ解析を担当した。世界初の鉛直降雨データは宝の山で、データ解析が面白くて仕方なかった。なんとかアメリカの鼻を明かしてやるうと、武器は竹やり(予算と人の数が違う)でも、知恵と勇氣(奮闘)でチームで一丸となって奮闘した。

そのおかげか、おそらくTRMM・GPM日本チームは、米国や世界からも一目おかれていると自負している。現在でも、新しい発見があった時、新しいものが見方が出てくる時、自分の仕事が役立つと思える時に喜びを感じることができ、大変に幸せな仕事人生を送っている。

TRMMが落ち着いた頃、上司の薦めで本部推進部に異動し、後継のGPMとEarthCAREの立ち上げを担当した。GPMの立ち上げは、TRMMの立ち上げよりは簡単だったと言われるが、

それでもいろいろ大変だった。

[ABOUT LIFE]

周囲の理解と協力がないと仕事は続けられない

大学院在学中の27歳の時に、となりの分野の同級生と結婚し、12年後の39歳10か月で子どもを授かった。GPMがプロジェクト化した時で、3月産まれて4月から保育園に入れるわけでもなく、そもそも待ちに待った子どもの誕生が嬉しくて仕方なかった。育児休業を長く取ることについて、1年と半月の休業を取り、次の4月に復帰した。

赤ちゃんの成長は極めて興味深く、好奇心のよい対象だった。大学院の後輩で、霞が関キャリア官僚になり、私よりもずっと早く2人の子ともに恵まれて先輩ママになっている知人がいるが、彼女は2回とも1年以上育児休業を取ったそう。『本当に子どもを見て楽しくて興味が尽きなくて、育児休業を長くとって観察するのがお勧め!』と彼女が言う通り、私も皆さんと同じことを伝えたい。

EarthCAREがプロジェクト化した時、幸せなことに、2人目と産まれた娘が産まれた。この時は昇進がなかった。育児休業で途絶する評価が1年目からやり直しになる、という噂を聞き、産後休暇だけで復帰することにした。7月に産後、8月の昇進面接に呼んでいただき、8週間有給休暇を少し足して9月に復帰し、10月から無事昇進させていた。

幸い2人目の子どもは手がかららず、10月に復帰して良い調子で仕事をしていた。ところが調子に乗ると良くない。娘が生後10か月の頃、普通の風邪かなと思つてそれを2、3回繰り返したら、みるみる悪化。ある日保育園から呼び出しの電話がかかってきて、娘を迎えたとその足で行った病院で

重篤な肺炎と診断され、入院になった。そして結局、完治まで2年もかかった。

その間、娘の自宅療養に実家の母が毎日通つて看病に来てくれた。保育園は時々顔をだせば退園しない措置としてくれた。当時の上司が子どもにとつての母親は一人しかいないから、と、温情で自宅に近い東京での勤務を時々認めてくださった。これがなかったら、私は仕事を続けられなかったと思う。

看護休暇が年に5日というのは、元気な子どもであれば足りる日数だが、私の場合、4月のうちに5日使い切る年が続いた。子どもが生まれる前には余りまくっていた有給休暇も、子どもの病気で使い切るくらいになった。

[HOW TO OVERCOME]

次世代育成は社会の責務

私の場合、40歳になるまで、やりたいだけ思いきり仕事ができただ。研究のような仕事を馬力でもつてできるのは30代代ではないかという気もする。そういう意味では、やりたいことをした後に、子育てがやってきたので、仕事の両立で悩むという事はなかった。子育てのせいで自分が犠牲になっているという感覚もほとんどない。しかし、子どもの運動会で活躍しにくい、子どもが成人する前に退職になってしまう、孫の世話を手伝えないうなど高齡だと辛いこともいろいろある。全ての物事には、良い面と悪い面、両方があるのだろう。

次世代を担う存在だと考えれば、子どもは社会の公共財だと言える。自分が受けた教育の機会を次世代の子どもに授けることは社会人としての責務だと思う。病

気や授業参観など子どものことで仕事を休まざるを得ないとき、自分を納得させる理由としてそう考えるようにしている。周囲の方々も、そう思っていただけではないなと思う。

[FOR THE FUTURE]

寛容さがあるだけで物事はうまく解決する

介護の問題も子育てもある人がうまくできていて、別の人ができていないと、その人の能力がなにか努力が足りないとか考えがちかもしれない。でも、子どもの健康状態は一人ひとり違うわけだし、同じ規則で全て運用できるようには思えない。生真面目な方はルールを厳格に適用しようとするだろうが、困っている人がいるとき、わずかな寛容さがあるだけで物事はうまく解決するようになると思う。

私もアレルギーや肺炎で苦しむ子どもを持って、弱者側の立場を経験した。その際、上司や保育園から寛大な措置をいただけて私が何とか仕事を続けてこられたように、自分もそうありたいし、会社も社会もそうあってほしいと願う。



Profile

- 【入社年度】1997年度 【雇用形態】常勤 【勤務地】筑波
- 【略歴】筑波大学第一学群自然科学類卒業、同大学大学院環境学研究科修了、東京大学大学院理学系研究科地球物理学専攻単位取得退学、博士(理学)。
- 【出身地】東京・千葉
- 【趣味】ピアノ
- 【家族構成】夫、子ども2人(長男小6、長女小1)

[ABOUT WORK]

宇宙の謎を解き明かす 太陽系探査の仕事

松岡 彩子

宇宙科学研究所 太陽系科学研究所 准教授

宇宙科学研究所(宇宙研)の主たる活動に、飛翔体を用いて宇宙の諸現象を観測し、謎を解き明かし、真実を探求することがある。観測する対象や観測の手法にはさまざまなものがあるが、私が取り組んでいるのは、地球や惑星の周りの空間に直接飛翔体を送りこんで、磁場を測定することである。

磁場を測ると、地球を含む惑星の表面や内部構造を探る手がかりとなる。また、地球や惑星周辺におけるプラズマ、電流のふるまいがわかる。例えば、地球の周りには地球の磁場が支配的である磁気圏と呼ばれる領域があるが、磁場を測ることは、磁気圏の形状・ダイナミクス、磁気圏と太陽風との相互作用・エネルギーの流れ、磁気圏プラズマ

と電離圏・大気との相互作用について知ることにつながる。

現在の私の仕事は、磁場を測ることを中心に回っているが、当時文部省の付置研だった宇宙研で大学院生として研究をしていた頃は、人工衛星で測定した宇宙空間の電場の解析を行っていた。1989年2月、大学院に進学する一カ月前に、オーロラ観測衛星「あけぼの」が打ち上げられた。

修士課程の2年間は、電場測定データを処理して科学研究に使えるようにするプログラムの開発と、自分自身のテーマの研究に明け暮れた。大学院進学後の19年後、2008年に「あけぼの」のプロジェクトマネージャを拝命し、2015年4月に運用を停止する役目を負うことになる。この時にはもちろん予想していなかった。

[ABOUT LIFE]

女性研究者の活躍を 海外で目の当たりに

私が大学院生として宇宙研に入った頃は、日本の学会では女性研究者は本当に少なかったが、何人かいらっしやっただ女性の先輩は皆さんとても優秀で、やはりりと活躍されていた。少し前まで一般的な会社の採用が男女別だった時代である。1986年の男女雇用機会均等法施行の後、役割分担的な考え方は徐々に薄れつつあったが、女性は男性の3倍働かないと認められないと言われ、特に理系の女性は就職はできても入社後の扱いや昇進に依然強い差別があると言っ話もあった。しかし私はこうした優秀な先輩方のおかげで、女性であることを理由に研究活動で差別を受けたことは、一部のつまらない例外を除けば記憶にない。

海外の学会に出かけると、女性研究者の活躍はもう目覚ましかった。同年代の若い女性研究者は全く珍しい存在ではなく、シニアの世代にも少数ながら女性研究者がいて、これはまだ日本では見られない光景であった。その方

たちがまた実にハワフルで、学会で鋭い質問やコメントをして男性の研究者をたじたじとさせていた。

大学院に進学した頃は、修士を修了した後は就職するつもりであり、実際修士2年になると企業を訪問したり、公務員試験に合格していたので国立の研究所を訪問したりした。パブル崩壊の直前で、求人倍率は最高。余程難しいところではなければ、女性であつても歓迎してくれる会社がたくさんある状況だった。しかし結局、博士課程に進学し宇宙研に残ることを選んだ。

1994年に博士課程を修了し、宇宙研に助手の職を得て、火星探査機「のぞみ」の磁場観測器チームに入った。1998年の打ち上げには、PI(主任研究者)として臨むこととなった。「のぞみ」は残念ながら火星周回軌道に入ることができなかつたが、その時の経験を後のプロジェクトに生かし、現在、水星探査計画 BepiColombo の水星磁気圏探査機(MMO)に搭載する磁場観測器のCoPI、ジオスペース探査衛星(ERG)搭載の磁場観測器のPIとして打ち上げ準備を行っている。

若手の助手であつた20年前は、衛星プロジェクトの試験現場も研究者の学会も女性が圧倒的に少なかった。顔や名前をすぐに覚えてもらつたことができた。逆に、私は人の名前や顔を覚えることが大変苦手なので、相手は私の名前を知っているが私が相手のお名前がわからない、ということが多くあつた。その頃に比べると今は、衛星プロジェクトに携わる女性も、女性研究者も格段に増えて喜ばしい。

[HOW TO OVERCOME]

プロジェクトのために 個人に頼りすぎない

しかし、若い世代、特に女性が今

後衛星プロジェクトに参画していくにあたり、日ごろ気になつていることは多々ある。衛星プロジェクトでは当然、プロジェクトを成功させることに大部分のリソースが割かれる。個人についても、衛星プロジェクトの責任ある立場につくと、自分の持っている心や時間の大半をプロジェクトに割く必要が出てくる。それは打ち込める仕事があるという大変幸福なこと、プロジェクトが成功した時の達成感も大きい。

プロジェクトの成功は、メンバーの高い能力と貢献にこそ支えられるのは当然のこと、と断つた上で、プロジェクトの円滑な推進を過度に個人の努力に頼ることは、かえってプロジェクトのためにならないだろうと考える。長いプロジェクトの期間、常に全力で走り続けられる、時にはキャパシティを超えた仕事ができるのでなければ責任ある仕事を任せてもらえないようでは、真に能力の高い人の参画を阻み、また能力の十分な発揮を難しくすることになるであろう。

20年前に比べれば、計算機の能力向上や便利なツールの充実により、もちろん仕事の能率は向上している。しかし、質を維持あるいは向上させながら、担当者の負担を減らす工夫の余地は、少なくとも宇宙研においてはまだまだあるように思う。

私も宇宙研の世界だけで仕事をしていたらこのような発想は持たなかつたかもしれない。BepiColomboプロジェクトでヨーロッパ人と一緒に仕事をし、時々これはプログラムで制御すれば、毎回人が立ち会わなくても短時間で安全な試験が可能なのではという「何故この文書Xを改めて作らなければならぬのか。すでに作った文書Yと文書Zのそれぞれ一部を足したものと同じではないか」等の質問や要求を受

けた。彼らの要求と宇宙研のやり方との板挟みになるのはつらかつたが、一方で、おそらく宇宙研のやり方はヨーロッパの科学衛星に比べると人的リソースの高効率利用という観点で弱く、個人により多くの負担を強いっているのだなということでは理解できた。

ただし、負担軽減のための自動化や効率化には、システムの改良に、少なくとも短期的には大きな予算や人的リソースが必要となることも忘れてはならない。

[FOR THE FUTURE]

更なる自動化や効率化、 真に必要な仕事の選別を

衛星プロジェクトは、立案に始まり、衛星を作つて打ち上げて成果が出てくるまで、10年がつの単位となるような仕事である。私の世代はあとつくりらしいが、衛星プロジェクトに関与できないので、基本的には現行のシステムに乗っていくこととなるだろう。しかしその後いくつも科学衛星のプロジェクトが続いていくことを考えれば、優秀な人材の有効な活用のためにも、更なる自動化や効率化、真に必要な仕事の選別を図っていくべきであろう。



Profile

【入社年度】1994年度 【雇用形態】常勤(教育職) 【勤務地】相模原

【略歴】東京大学理学部地球物理学科卒業、同大学理学系研究科地球惑星物理学専攻博士の学位取得。宇宙科学研究所太陽系プラズマ研究系助手、磁気圏探査衛星「あけぼの」プロジェクトマネージャ等を経て現職。

【出身地】静岡県

【趣味】温泉、囲碁(初心者)

【家族構成】夫

[ABOUT WORK]

「かぐや」のデータで月の岩石や鉱物を調べる

宇宙科学研究所 太陽系科学研究系 助教

大竹 真紀子

私は1997年度の終わりに中途採用でJAXA発足前の旧NASAに入社し、開発部員として月周回衛星「かぐや」に搭載する観測機器の開発を担当した。当時

は予測できていなかったが、その時以来「かぐや」が打ち上げられるまでの10年、運用が約2年、その後でも「かぐや」で取得したデータの解析研究を行っているので、長く「かぐや」と関わっていることになる。

大学時代は地球上の岩石を採取・分析することで地球の初期環境を推定するという研究をしていたので、研究対象が地球から月に変わったわけである。けれども、当時の私にとっては非常に大きな分野の違いに感じられた。

私が担当することになったのは「かぐや」に搭載する観測機器である。月面を分光観測して月表面の鉱物・岩石分布を調べるための機器だったので、地球と月という観測対象の違いはあれ、結局は鉱物であり岩石を研究することになった。その意味では、観測の目的としてはそれほど違和感無く仕事を開始することができたと思う。

とは言え、それまで分析のための装置を開発した経験は多少あったものの、衛星に搭載する観測機器の開発経験がなかった私にとっては、全てが新しく、解らないことだらけだった。最初の数カ月

とにかく省略語が片端から解らなくて、皆さんにご迷惑をかけた一つ教わったのを覚えている。

[ABOUT LIFE]

ストレスなく働くため優先順位を決める

その後、働き始めて3年目に結婚した。だが、結婚からたった3週間ほどで、環境の変化もあり、早くも疲れを感じるようになった。そして、ある事件がおきる。無理して作っていた夕食が、いつの間にか、とんでもなくしょっぱくなっていたのである。自分でも気づかないうちに、味がわるく、解らなくなるまで疲れていったようだ。この事件を経て、そうそうに仕事と家事との両立を諦めることにした。これは、平日家事はやらないことにする。夕食は外食にする、という方針だ。

それ以来、我が家は現在も平日は100%外食で、私はかなりダメな主婦だ。だが、夫と2人で、自分たちにとって優先順位が高いのは何か、を議論して決めていくことである。そのおかげで、「もっと仕事が増えたいのに」というストレスを抱えることなく、もっとうまくやれるはずなのに、という焦りはありつつも、仕事を続けられるように思う。

一方、職務上は入社4年目あた

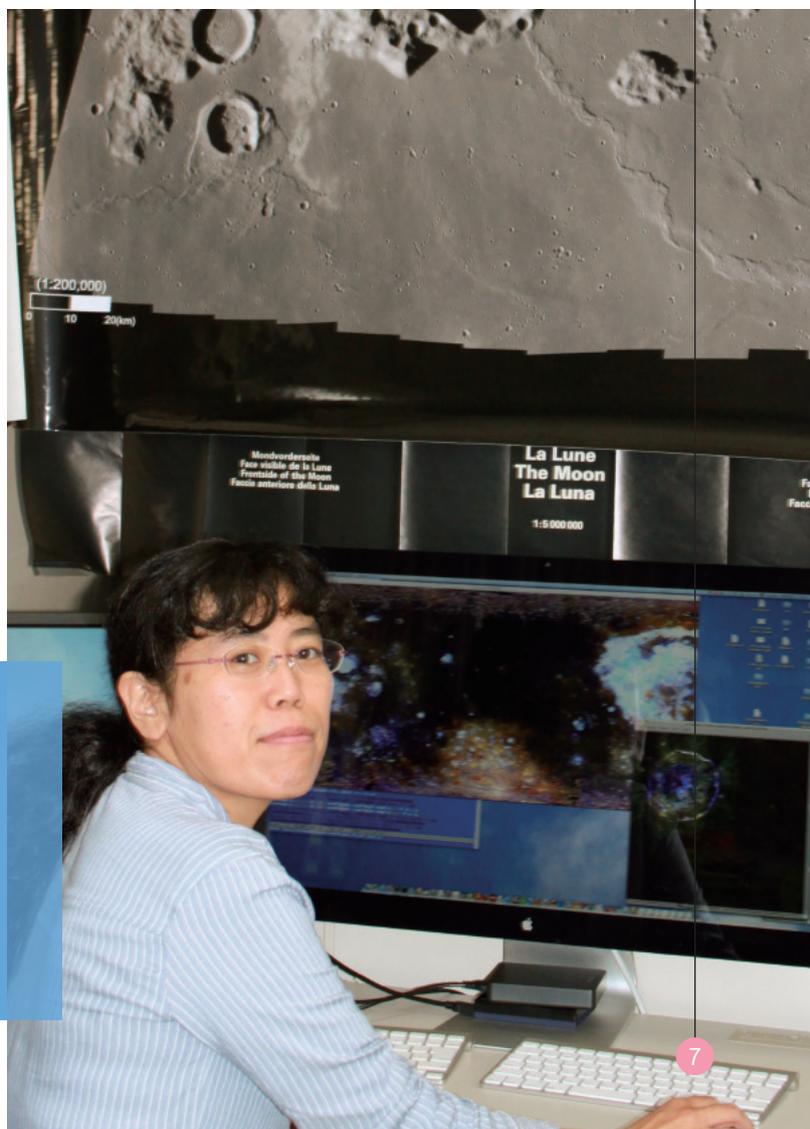
りに、「かぐや」に搭載したマルチバンドイメージャという機器の開発責任者を担当することになる。また、JAXAの発足時には、開発部員から教育職(現助教)になった。そして、2007年の「かぐや」の打ち上げと2009年までの運用を経て、現在は「かぐや」で取得した観測データを般に公開して使ってもらうためのデータ校正などの処理、同データを使った解析研究や論文執筆、今後の月惑星探査のミッション創出に向けた科学目標の設定検討や探査機への観測機器の開発などを行っている。

「かぐや」の時には最初の開発フェーズから参加して、打ち上げ・運用・データ校正・処理・解析研究の各フェーズを経験。現在は、次のミッションの検討・立ち上げにも参加させて頂いているので、合わせてやっとな探査の1サイクルを経験しつつあると感じている。今後は2サイクル目にこれまでの経験を着実に反映させねば、と思っている。

[HOW TO OVERCOME]

自分の研究にかける時間をつくるために

仕事との向き合い方に関する私の課題は常に、適切な仕事とそれを片付けるための、個人の研究とそれを論文化するための時間確保がともすると一番後回しになるということである。多くの仕事は、当然ながら適切なし



はできるだけ急ぎで終わらせる必要がある。かつどんな職種でも同じだと思うが、適切な仕事はやってもらっても常に新しく増え続け、無くなることはない。すなわち、個人の研究のための時間が無くなってしまう、ということだ。

こうなる理由は明らかで、個人の研究だけは適切な自分で決められるからだ。今日この仕事が終わったら、明日から自分の研究解析をやろう、と思ってもそんな明日は来ないので、そういう日々を送っている間にフラストレーションが溜まる。

私なりの対処は、「適切な仕事」が片付いていなくても、自分の研究をやってしまえだ。とは言っても、仕事の内容や適切な重要度に応じて、自分が可能な範囲で応じて、かつこわらくても前に進んで行きたいと思っている。

[FOR THE FUTURE]

目標に向かって努力する研究者の一人として

考えてみると「仕事と家庭の両立を諦める」にしても「適切な仕事」を片付けることは諦めるにしても両方とも逃げの作戦だ。かつこい作戦とはとても言えない。それでも、私の研究分野では日本でもまだこれからやるべきことがたくさんある、月惑星探査データを使った解析研究を進展させるための基盤を作る、という目標に向かって努力する研究者の一人として、かつこわらくても前に進んで行きたいと思っている。

Profile

【入社年度】1997年度

【雇用形態】常勤(教育職)

【勤務地】相模原

【略歴】東北大学大学院博士(理学)

【家族構成】夫

[ABOUT WORK]

ロケット開発での経験 それが私の原動力

研究開発部門 第4研究ユニット 研究員

川邊 泉

外の田代でのH2Bロケット試験機のBFT、角田の燃焼試験、種子島のH2Bロケット試験機のCFI、フェアリングの分離試験を経験させてもらえ、ロケット開発の難しさや楽しさをメンバーの方を含め、先輩方に教えて頂いた。また自分自身が知らないこと、できないことを習得できる実感を持たせてくれたことが、今、私がこにしている原動力になっている。

[ABOUT LIFE] 今できることを丁寧に 一つ一つ積み重ねて

正直なところ、宇宙や星に特別な興味を抱いたことがない。そんな私が何故か宇宙開発を担う公的機関で働いている。今、現在も不思議に思うところだ。もともと大学では電気・制御・通信工学を軸にしている学科に在籍していたため、在学中は卒業後は家電メーカーか自動車メーカーに就職するのだろうと漠然と考えていた。

けれども、就職活動を進める中で自分の将来について真面目に考えた時、3つのことが頭に浮かんだ。せっかく工学部の電気工学を学んだのだから「つくる」を実践したい、「せつかくつくる」なら作る「より」創る「小さいもの」より「大きいもの」が良い。これらのことからJAXAを志望し、ご縁があつて、今、JAXAで働いている。

私は、できれば子育ての時期(小学校卒業まで)は子育てに専念したいと、結婚した時から考えていた。それは、私にとって母としての最高の見本は、やはり自分の母親だったからだ。母は私が小さい頃から不安な時にはいつも傍にいてくれた。それは、幼い私にとって絶大な安心感だった。母は子どもにとって、唯無二の存在だからだ。そういう思いもあつて、私は妊娠した時、退職を考えた。

かとても不安だったが、母と夫の後押しから仕事は辞めないことに決めた。育児休暇は、子どもが母乳を離れるまでは一緒にいたかったので、子どもが2歳になるまで取得させてもらった。変化の大きい2歳までの毎日を一緒に過ごせたおかげで、寝返り・お座り・ハイハイ・たっち・歩く・言葉が発する、成長過程一つも見逃さず、その場に立ち会えたのは大きな喜びだ。

また、今の私にとって自分のキャリアよりも子どもと一緒にいる時間を大切にしたいので、仕事復帰後、育児短時間勤務を選択した。それでも、帰宅後も夕飯の買物、洗濯物の取入れと片付け、掃除、夕飯の支度をし、一緒に食へて、お風呂へ入れればもう寝る時間。育児中のように2人で思いつき外で遊んだり、ゆつくり子どもが満足するまで絵本を読んだりする時間が十分には取れていない。それは、家事の工夫で何とかするしかない、これからの課題だ。

[HOW TO OVERCOME] 自分の時間を大切に

育児や介護・家事をしている方は皆さん同じかと思うが、毎日の中に自分の時間を見つけていることは難しいと思う。そんな中でも名古屋から関東へ赴任した時に始めたフラダンスだけは今でも続けている。週に1度、1時間、汗をかくことで気分転換になっている。一見、ゆつくりした動きのフラダンスだが、常に中腰の状態で優雅に二つづつの動作に意味を持っていて、アロハの心を感じながら笑顔で踊らなければならない。毎回、先生に怒られながら、アロハの心を習得すべく頑張っているところだ。

また、子どもが生まれてからベビーマッサージや手作りアロマを習いに行き、仕事以外の友人・仲間ができて、たわいもない話や育児の

仕事に関しては、ありがたいことに上司や同僚の先輩にいろいろと助けてもらっている。少し業務が多く、短時間勤務後に残っている「早く帰ってあげて、その後のことは任せて」と声掛け頂くこともあり、本当に感謝している。もちろん、できる範囲で勤務時間後に残ったり、夫とスケジュールを調整して泊りがけの出張にも行かせてもらっている。

勤務時間が短く、会議に出られなかったり、突然お休みを頂くこともあるので、いつも気を付けていることが二つある。二つ目は、いつでも私の業務内容や課題がわかるように資料等は整理しておくこと。二つ目は、どんな

相談を気軽にできることも今の自分には大切な存在になっている。

[FOR THE FUTURE] 自分らしく笑顔で 毎日を過ごしていきたい

やりたかったロケットの仕事へ戻ってから産休・育休を挟んで働いているのは1年程度。まだまだ、わからないこともできないこともある。短い勤務時間で毎日の業務に忙殺されるだけではなく、ロケット電力伝送系担当として、次世代の技術の獲得を目指して努力もしていきたい。

そして、これからも子育ては、可能な限り自分の手で自分の時間を過ごす。子どもと一緒に、母として、妻として少しずつ成長できればと思う。また、仕事復帰して5カ月、育児短時間勤務をさせてもらっているが、時間の使い方・気持ちの切り替え方、やっぱり仕事を辞めて子育てに専念したいという迷うことや、子どもにとって何が良いかが、わからなくなることもある。毎日が手さぐりで、上手くいく日もあり、ダメな日もある。そんな中で、これからも自分の大切な存在を忘れずに自分らしく笑顔で毎日を過ごしていきたい。



Profile

【入社年度】2008年度 【雇用形態】常勤 【勤務地】筑波宇宙センター
 【略歴】大阪府立大学大学院工学研究科 電気情報システム工学分野修士課程修了
 【出身地】大阪府 【趣味】フラダンス、手作りアロマ、ベビーマッサージ
 【家族構成】夫、子ども1人(長男2歳)

[ABOUT WORK]

JAXA発足時に 初めての転勤を経験

阿部 玲子

航空技術部門事業推進部 参事

私は、1974年、国家公務員試験の初級試験に合格して当時の科学技術庁航空宇宙技術研究（NAL）に採用された。当時のNALの周囲は、住宅もまばらで寂しかった。そんなNALに就職を決めたのは、試験を受けた他の官庁等に比べれば、職場の雰囲気があること、航空宇宙というところで、漠然と夢がありそうだったという理由である。

最初の職場は、管理部庶務課係であった。直属の上司からは、「前例に倣うだけではダメ。どうして前任者は、そうした判断をしたのかその根拠、理由を自分で調べて仕事を進めなさい。」先輩からは、「管理部は、研究者をサポートする部門。研究者から何か相談があったときに、研究者の提案が、仮に、法律や規則に従って判断すれば、ダメ」という場合でも、それで終わりにしてはいけない。どういった方法なら法律や規則にも敵い、研究者の希望を叶えることができるかを検討しなさい」といった言葉をもらった。こうした言葉は、その後の私の仕事に対する考え方に大きく影響を与えた。とはいっても、上司の中には、「女性は、職場の花であってもらいたい」と、公然とおっしゃられる方がいるような時代である。女性職員を育てるといった意識は低かったと思う。

1985年の男女雇用機会均等法の施行など、時代は、急激に男女平等へ動いていく。女性にも昇進の道が開かれたが、女性の先輩の中には、突然、責任を負わされ、その重さに退職された方もおられた。それまで、教育もされず、いまま、責任ある仕事を与えられ、そして、梯子をはずされたに等しい。そのような状況を男性の先輩に嘆いたことがある。すると、「あなたは違うだろう。少なくともあなたのことを女性だからと差別してきたことはないよ」と、改めて、私は恵まれていたんだと思っただけであった。

高校卒業とともに就職した私は、特に専門があるわけではなく、人事異動によって、その後、共済業務、広報業務などを担当した。共済業務に配属されたときは、年金のエキスパートになるべく勉強もしたし、職員へのサービス向上のために、簡便に年金額をはき出せるように汎用ソフトを使って仕組みを作ったりもした。そして、2000年頃からは、多くの期間を広報業務に従事してきた。旧NALでは、女性の転勤を伴う異動は皆無といってもよく、2003年、JAXA発足の年に広報部に配属され、初めての転勤を経験することとなる。この異動が私の大きな転機になった。新たな文化に触れ、多くの人と関わりながらたくさん刺激を受け、現役最後の期間ではあったが、少しは成長できたのではないかと思う。

また、与えられた機会であっても、その都度、新たな出会いや刺激を受けることができたのは、幸運だったと思う。

[ABOUT LIFE]
時間の使い方を
調整しながら乗り切る

さて、男女平等とはいっても、出産という大きな仕事がある女性にはある。私にも2人の子どもがいる。結婚した際には、子どもができたから仕事は辞めるつもりでいた。子どもが小さいときには、母親はそばにいるのが当然と思っていたからだ。しかし、上司から「子どもに手がかかるのは、一時。子どもはいつか成長し、親の庇護を必要としなくなる。頑張ってみたら」と言われ、夫と相談し、仕事を続けることにした。夫の両親も、私の両親も内心、反対だったのではないかと思うが、夫と私の決断を受け入れてくれた。

後から聞いたが、私の父は夫に「あの性格だから、仕事も手を抜かないだろう。大丈夫なのか」と言っていたそう。その父が亡くなる前に、2人の子ども（当時、小2と6歳のようすをみて、「早くから他人の中で過ごすのも悪くないかもしれない」と言ってくれた。2人とも生後35日から保育園育ちだったのである。その言葉は、母親として、仕事をしていることに、どこか罪悪感をもっている私に救いになった。それから何度か、子育てと仕事の両方に悩む場面があったが、時間の使い方、パランスのとおり方を、時々で調整しながら乗り切ってきた。

[HOW TO OVERCOME]

精神バランスを
保てたのは子育て期間
に仕事したから

子どもが乳児から幼児期は、い

[FOR THE FUTURE]

何を優先すべきか、
自分の気持ちと
折り合いをつけて

この女性職員のロールモデルの



Profile

- 【入社年度】1974年度 【雇用形態】常勤
- 【勤務地】調布航空宇宙センター
- 【出身地】東京都
- 【趣味】旅行、読書、音楽鑑賞、楽器演奏、手芸
- 【家族構成】夫、子ども2人（長男33歳、長女31歳）

[ABOUT WORK]

男女の区別なく働ける職場で 国内外の調整業務を任される

広報部 主任 岩木 環

「入社したら何をやりたいか」との問いに「国際調整業務」と答えたところ、入社早々、調査国際部に配属された。

スペースシャトルの打ち上げに伴う渉外業務や国際協定などの海外との調整業務は、自分にとって未知の業務であり、全てが新鮮で面白かった。スペースシャトルの打ち上げを目的に、発射時の音と振動を肌で感じた時には、自分が宇宙開発の端を担っていることを実感し、心から感動した。

入社4年目は、NASA広報リゾンとしてNASAジョンソン宇宙センターに派遣された。NASAにおいて宇宙飛行士の訓練を目の当たりにできたこと、NASAの中に入り込んでNASAを代表して調整を行い、国際宇宙ステーションにかかわる国際調整並びに若田飛行士が搭乗するミッション（STS-92）を支援できたことは、本当に貴重な経験であり、今の自分の礎となった。以降、有人・輸送・衛星部門の事業推進部と契約部に配属され、さまざまな業務を担当した。何度も海外出張し、さまざまな機関との間の契約・協定調整の前面に立つてきた。

私は小学生時代の5年半をヨーロッパで、中学・高校生時代のうち4年間をオーストラリアで過ごした。帰国子女である。人種は多岐にわたるオーストラリアで得た私の友人のルーツはインド、中国、アジア、ヨーロッパと多岐にわたっており、多様な価値観を肌で感じた。そういった経験からか、「将来は国際プロジェクトに携わり、国を代表して海外との調整を行う仕事に就きたい」と思っていた。就職面接時、

今年4月より広報部（筑波）に所属しているが、思えば入社してから今に至るまで、国内外問わず、調整業務の連続であった。さまざまな相手の意見を聞き、調整を行い、相手の主張に時に立ち向かい、時に同調し、物事を推し進めていく。私が担当した中で最も難しかった協定調整の1つは、日米間でJAXAを含め、7つの関係機関と調整を行わなければならないことがあった。そのような難しい交渉がまとまった時に、「やったー」と思う。入社してから今まで、男女の区別なく仕事を任せられ、女性であることを特に意識することなく働いてきた。職場環境として、非常に恵まれていたように思う。

[ABOUT LIFE]

身にしみて感じた 育児制度の重要さ

入社してから結婚するまでの5年間は、仕事漬けの毎日だった。仕事が楽しく、毎日夜中まで残業したが、苦ではなかった。2001年に同じくJAXAに勤める現在の夫と結婚したが、結婚自体は特に生活に大きな変化は与えなかった。そんな中、夫のフランスリヨン工科大学への研修が決まり、出発も間近になった。子供を授かった。出産という人生における大イベントに夫婦で立会いたいとの意向より、有給休暇と産前休暇をフルに活用し、安定期に入ったタイミングで私はフランスに飛んだ。長女を無事フランスで出産し、生後3か月で日本に戻った。育児休業も取得し、産後1年で職場に復帰した。休暇の制度が整っているJAXAに勤務していたからこそ夫婦立会いの出産を実現できたと思う。有難い。

子供を保育所に預けながらの勤務が始まった。今までと勝手が違い、残業はできず、お迎えの時間に追われる毎日。家に帰ると、子供の食事とお風呂と洗濯と片づけが待っている。復帰2年後に2人目の子供を授かり、忙しさに更に拍車がかかった。毎日の家事を少しでも怠ると原状回復が難しく大変だ。そんな中、子供から離れて職場で仕事のことだけを考えていられる時間はある意味気分転換にはなったが、限られた時間の中で多くの仕事をこなさなければならぬストレスもあった。やはり育児と仕事の両立は簡単ではない。フレックス制度は非常に有難かった。子供が熱を出して保育園から呼ばれた時などにフレキシブルに勤務できた。今は小学校の授業参観など、学校行事の際にも活用させてもらっている。看護休暇の恩恵にも与った。子供が小さい頃はよく体調を崩していたし、インフルエンザにかかったときなど、週間も学校に通えなくなった。夫と実家の親に頼ることもあったが、何とか乗り切ってきた。育児制度の重要さを

今、身にしみて感じている。

HOW TO OVERCOME]

大事なのは気分転換と 頑張りすぎないこと

育児と仕事をバランス良く続けるために、「頑張りすぎないこと」が非常に大切である。忙しい時の食事はお店の弁当や惣菜に頼るのもいいと思うし、仕事は自分ひとりで抱え込まず、難しいことは同僚、上司に相談した方がいい。育児では夫、実家はもちろん、友達にも甘える。境遇が似ているからか、保育園時代のママ友の多くが今でも交流が続いている。仕事で帰りが遅くなる時に子供を預かってくれるママ友の存在は本当に貴重である。逆に誰かが困った場合は進んで名乗り出る。助け合いの精神が大事である。

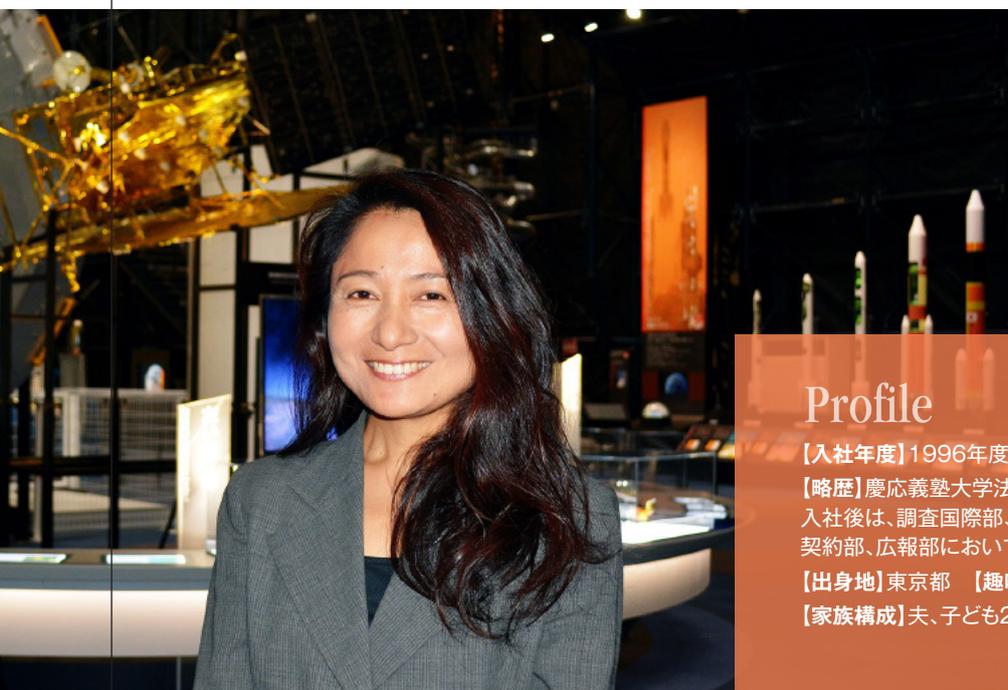
気分転換もとても大切だ。お昼休み、私は時間があればテニスでリフレッシュするようにしている。嬉しさに、子供が成長して週末には家族全員でプレーできるまでになった。私の小さい頃の夢はテニス選手になることだったが、今は息子が錦織選手を目指して頑張っている。私も子育てが一段落したら、年齢別のクラスで日本一を目指したい（夢は大きく）。夏休みも、なるべく長期の休暇を取り旅行などに行き、非日常の時間を過ごせるように心がけている。どんなに忙しくても週に1度のピラティスは欠かせない。毎週末、私がピラティスに通っている間子供は面倒を見てくれていた夫にも感謝！

FOR THE FUTURE]

「ライフ」の充実が 「ワーク」の充実

夫はかなりの子煩悩なので育児に積極的に参加してくれるが、一般的にはまだまだ男性の育児参加が

足りないと感じる。男性も育児休業をとるのが当たり前の時代がきてよい。多様なライフスタイルに対応して、自宅勤務やフレックス制度の全職員適用など、もっといろいろな働き方があってよいと思う。今の自分にとって家族はかけがえない存在であり、夫と子供との何気ない日常に幸せを感じ、明日頑張るパワーをもらっている。「ライフ」の充実が、「ワーク」の充実にも繋がっている。男女問わず、皆が支え合い、ワーク・ライフ・バランスを実現できる、そんな職場環境を創っていかれたらと思う。



Profile

【入社年度】1996年度 【雇用形態】常勤 【勤務地】筑波
 【略歴】慶応義塾大学法学部政治学科卒業。
 入社後は、調査国際部、有人・輸送・衛星部門の事業推進部、契約部、広報部において業務を担当。
 【出身地】東京都 【趣味】テニス、テニス鑑賞、ピラティス、ピアノ
 【家族構成】夫、子ども2人（長女11歳、長男8歳）

[ABOUT WORK]

自国だけでなく人類のために 貢献できるのが、宇宙開発

第一宇宙技術部門事業推進部主任

中村 祐子

日本と世界をつなぐ仕事に就きたいという漠然とした思いから、大学在学中に休学をして、米国のワシントン州でインターンシッププログラムに参加した。自分が「外国人」になり、また自分の国を外から眺める初めての機会だった。「自分のアイデンティティは何か」ということに向き合う1年間だった。帰国後は、技術力と経済力を備えた国だからこそできる国際貢献に携わりたいと思うようになった。宇宙開発は、日本が自国だけでなく人類のために貢献できる分野としたい、入社試験を受けた。

見を持った方々と一つの合意に達するための調整を行う。法務的な専門性だけでなく交渉の進め方など、日々の業務の中にも学ぶところが毎日だ。

[ABOUT LIFE]

強制ではなく共生 教育ではなく共育

入社後は、主に国際協力や広報業務に軸足を置きつつ、種子島宇宙センターやNASAジョンソン宇宙センター広報室での駐在など、JAXAでなくては経験できないような部署や業務を希望してきた。H-IIAロケットの初号機打ち上げ、野口宇宙飛行士が搭乗したスペースシャトルの飛行再開ミッション、そして「きぼう」日本実験棟の打ち上げ、組立てミッションなど、前例のないところに、チーム丸となってアイデアを出し、内外の関係者と調整をして実現させた。これらの経験は、仕事上だけでなく、人生の糧にもなっていると思う。

朝は3時半に起きる。洗濯したり、息子の学校の準備や宿題を確認したり、娘の保育園の準備や連絡帳に先生への連絡を記入したり、郵便物や学校・園の資料確認をしたり……。そのうち夫も起きてきて、一緒に台所の片づけをしたり、風呂掃除をしたり、子どもたちを起こして着替えさせる。そして、夕食も含めた食事の準備をしていると6時半。家族全員で朝食をとる。7時半前には夫と息子が出勤、登校し、程なくして私と娘が家を出て、娘を保育園へ預けた後、8時半に出発。これが通常の我が家の朝の流れだ。

子供を持つ前は、3時半に起きることなど、ロケットの打ち上げシフトに入らない限りあり得なかった。それでも、2人目の子どもが生まれる前までは、以前の生活スタイルで暮らしていた。家事は息子を寝かせてから片づける。早く寝かしたい一心で、毎晩ドライブに出かけていた。しかし、息子が大きくなり、娘が生まれた後は、これまでのスタイルを無理やり維持するのではなく、子どもたちに合わせることで生活がしやすくなることに気がついた。朝が早い一方で、私は子どもたちと一緒に9時半に就寝している。

また、成長と共に、子どもたちのことをしつけや学習の場面、ぐずったり公衆の場で騒いだりする場面で見ることが増えてきた。「些細なことでも叱りすぎたかな」とかもこのころいう風に仕向けられなかったかな」と夫婦で話し合い、より良いやり方を模索している。ぐずっていたのを叱った後に、子どもが熱を出してしまつたことがしばしばある。あ、あの態度は具合が悪いというシグナルだったんだと気づき、次はちゃんとシグナルを感じてあげないと反省する。

生活スタイルを強制するのではなく、家族が互いに笑顔でいられるよう共生する道に改善していく。子育てとは、子どもを一方的に教育するのではなく、子どもとの関係を通じて、親も共に学び育っていくのだとつくづく思う。

[HOW TO OVERCOME]

ふたつの世界を 行ったり来たり

私の両親も夫の両親も共働きだったせいか、双方の両親は夫婦で働くことに心からの理解を示してくれている。身近な家族に、苦勞や努力を共感してもらええる環境は、非常に恵まれている

と思っている。子どもたちがもつと幼い時には体調を崩すことが多かったが、母には本当に助けてもらったが、双方の実家が割と遠いため、極力、子どもの病気や育児の問題など、夫婦で悩みながら試行錯誤するようにしている。

そのような場面で、仕事に取り組み時間は良い意味で家庭のことを忘れさせてくれ、自分が一人の社会人として社会とつながることができる場所と時間だと思つた。

家庭と仕事場のふたつの世界を日々行ったり来たりしながら、互いの世界が互いを維持し高め合う良い関係にあるかなと思つている。子どもたちも、私たち夫婦が子どもだった時と同じように、無意識に我々の生き方、背中を見て育つてくれていると信じている。

ちなみに、我が家は、あえて生活に手間がかかることを行っている。たとえば、冬の暖は自分たちで薪割りや薪ひろいをしてストーブを焚く、サンマやお肉を七輪で焼く、パンを生地からこねて焼く。子どもたちが生まれてからは、大好きだった海外旅行やスキューバダイビングは行かなくなつたが、子どもたちと過ごす日々の暮らしが、我が家のレジャーかなと思つた。

[FOR THE FUTURE]

次のことを考える

つい先日も、娘がぐずつたので「怪しいな」と思つていたところ、案の定夜中に熱を出した。急ぎよ夫婦で明日に通院・看病シフトについて話し合い、午前と午後で休みをとつたところだ。日々の生活もルーチンではなく、定期的に息子や娘の弁当持参日が登場したりする。こういった少し先の予定についても朝起きる時間を早めるなど、事前に夫婦で共有・分担して切り盛りしている。子どもだけではなく、我々の仕事上のピークもできるだ

け事前に共有し、家庭生活に影響が極力でないよう対応している。1日先、1か月先、1年先と、夫婦で仕事と家庭の両方のことを立てておく、いざという時にすぐ動けるかなと思つている。こういった面は、仕事場が教えてくれた行動かもしれない。5年後、10年後と子どもたちが成長するにつれ、家庭での悩みの質は変わってくるだろう。仕事も年次を経て、取り巻く状況も変わってくる。そんな将来のことも、たまに夫婦でほんやり話をしたりする。

いろいろな切り口の「次」のことを考えながら一歩ずつ歩みを進め、次を担う子どもたちや職場の後輩にきちんとバトンを渡せたらと思つている。



Profile

- [入社年度] 1998年度 [雇用形態] 常勤
- [勤務地] 筑波宇宙センター
- [略歴] 京都外国語大学英米語学 [出身地] 長野県
- [趣味] スキューバダイビング、世界遺産めぐり
- [家族構成] 夫、子ども2人(長男7歳、長女3歳)

[ABOUT WORK]

「好き」を仕事にできて 毎日が充実

衛星開発プロジェクトチーム 主任開発員

萩原 明早香

私が宇宙という分野に触れるきっかけになったのは、中学1年生からのYAC(日本宇宙少年団)の活動を通してである。特に、中学、高校で参加したアメリカ、旧ソ連での海外YAC団員との交流を通して、子どもながらも、宇宙という共通テーマでは、国を越えていろいろな話ができた。友情が生まれ、素晴らしい経験ができてきたと感じたことが大きい。

この経験から、宇宙開発に携わる仕事をしたいという気持ちになり、大学では衛星の軌道制御の最適化に関する研究をした。入社後は、主に宇宙輸送システムの機械系、電気系を中心に衛星・ロケット間の技術インタフェース調整業務などに従事した。社会人になり、JAXAで衛星開発を始めとしたプロジェクト業務を効率的に推進する必要があると考え、在職しながらプロジェクト・マネジメント学について学ぶため、社会人大学院に通い、念願であったMIT(Massachusetts Institute of Technology)大学院にも招聘研究員として短期留学する機会を持った。現在の衛星開発プロジェクトでは、衛星の姿勢軌道制御系を担当しつつ、プロジェクトの効率的な遂行のため、プロジェクト管理も担当している。

[ABOUT LIFE]

仕事と育児、両方あるから バランスがとれる

結婚当時、30代後半だったことから、職場では責任のある仕事を任されていた。そのため、子どもが欲しい反面、今仕事を休みしたらどうなるのだから、という漠然とした不安の中にいた。そんな中で、40代に入り妊娠が分かった時、プロジェクト業務を二時的にお休み

する。出産後の仕事への取り組みでの変化といえば、時間効率が数倍上がったことだと思ふ。保育園の送りは夫で、お迎えは私の担当である。毎朝、電車の中で今日やるべき仕事の内容と帰りの時間を確認し、時間内でどこまで会社に向ければならないかを考えながら会社に向かう。メリカとの打ち合わせで外勤も多く、また、残業もあまりできないため、いかに効率的に時間内で仕事をこなすかが、今の私には重要となっている。復帰後は誰とも話さないで、黙々と仕事をこなす。帰宅する日々もあつた。

また、復帰に際し、子どもを生後5カ月という、まだハイハイも十分にできない状態で保育園に預ける必要があった。今でも保育園の壁に飾ってある入園時の小さな娘の写真を見るたびに、親のために「生懸命小さい体で頑張って保育園に通ってくれている」と思ふと、熱い思いが込み上げ、涙する時がある。

入園が10月で、子どもの保育園の入園がしやすい時期が翌年の4月だったことから、産休・育休を合わせて約6カ月間取得して職場復帰した。ところが、私の予想に反して、産後の身体の回復が思うようにいかず、復帰ギリギリまで自身の体調の不安を感じていた。

また、復帰に際し、子どもを生後5カ月という、まだハイハイも十分にできない状態で保育園に預ける必要があった。今でも保育園の壁に飾ってある入園時の小さな娘の写真を見るたびに、親のために「生懸命小さい体で頑張って保育園に通ってくれている」と思ふと、熱い思いが込み上げ、涙する時がある。

[HOW TO OVERCOME]

感じないために ストレスを

初めての育児に際して、自分の性格から育児を自分1人でやることはできないと思い、育児支援サポートが手厚い地区での出産、子育てを考え、居住場所を選択した。また、幸いに私の母親が近居であったため、サポートを惜しみなくしてくれました。夫も私の体調や仕事への取り組みを理解してくれて、夫の取り組みを理解してくれて、夫のいることは十分にサポートしてくれている。子ども1人であるが、私の母親を含め3人がかりで育てているような感じである。本当にこれらのサポート無しには、仕事も育児も両立できない。感謝、感謝である。

子どもを理由に中途半端に仕事を休むことは分かっていて、自分も納得のいくレベルで仕事ができるように育児との両立を図っている。仕事も中途半端な状態でストレスを感じると、仕事にも育児にも悪影響があると考えると、自分の中で自分がやるべきこと、できることを選別して仕事をできるようにしている。

現在の衛星開発プロジェクト業務は、担当が複数人で補充し合える体制となっているので、子どもの急な病気などに対応できない時には相互に助け合ってもらいながら仕事ができる環境にある。このように、育児により仕事を削減するストレスをあまり感じることなく仕事をできるのも、上司や同僚、親や夫を含めた周りの理解とサポートがあつてこそである。本当に今の環境には感謝したい。

[FOR THE FUTURE]

両立を図れるポイントを見つけてほしい

働きながらの育児については、仕事と育児のバランスに対する考え方が人それぞれ違う。どれが正解というものはないので、自分がストレスをためない範囲で、仕事と育児の両立を図れるポイントを見つけてほしい。それが見つからなくて困った時は、男女共同参画推進室を始め、職場の先輩に是非頼ってみてほしい。少しは気持ち楽になるかもしれない。

また、育児明けの職場復帰に際しては、自身で復帰後の仕事の仕方を早めに上司と相談し、今後の道筋を明確にすることで、有意義な仕事と育児の両立を図ってほしい。

自分1人になれる時間を持てるようにしてもらい、買い物や友人と会ったりできる時間を作ることである。



Profile

- 【入社年度】1996年度 【雇用形態】常勤
- 【勤務地】東京
- 【出身地】日本大学理工学部航空宇宙工学科卒業。慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科修士課程修了。
- 【出身地】東京都
- 【趣味】アクアビクス、映画鑑賞、音楽鑑賞
- 【家族構成】夫、子ども1人(長女1歳)

[ABOUT WORK]

国際協調による解決策で 貢献したい

調査国際部国際課 主任

落合 美佳

2014年5月、3年にわたる国連宇宙部(UNOOSA)@ウィーンでの勤務を終えて、JAXAに帰ってきた。ほととすのJAXAの職場。遠く欧州の国連事務所で、日本人として仕事にあたる環境が、アウエーならば、日本のJAXAは紛れもなくホームだ。顔なじみの方々が、元氣だった? あっちの暮らしはどうだった? と声をかけてくれる。

有人宇宙技術と宇宙探査分野での国際協力の促進を新たなテーマとして、国連宇宙部が設定した任期付のエキスパートという公募ポスト。そのためのJAXA内人材公募が行われるというので挑戦したのが国連派遣のきっかけだった。当時、人事部が新しく立ち上げた社内人材公募制度では、自分が何を指すのか、それが組織と宇宙開発にどう貢献できるのかを見つめ直すきっかけにもなった。

初めて高校生時代の私は、地球環境保護が、宇宙の謎の解明か、たまたま平和問題研究かの三択から選びきれずにいたのが懐かしい。あの口、もはや一國では立ち行かない、国際協調による解決策で貢献したいと考え、大学では国際公法や(国際政治学を中心に)学んだ。国際宇宙ステーション(ISS)建設開始と日本の「きぼう」のニュースに大きな影響を受けて入った宇宙開発事業団への入社後は、種子島宇宙センターでH2Aロケット1号機から5号機までの打ち上げを経験し、日本が誇れる科学

技術の粋と発展を現場で感じた。その後、東京で配属された国際部では、外国機関とのやり取りで経験を積んだ。そして高校時代の三択が宇宙開発を切り口として、さまざまなに繋がっていることを肌で感じる。

[ABOUT LIFE] 国際色豊かな 国連宇宙部での経験

国連への赴任は、2011年3月の大震災直後のことで、最初の半年は、自分の国はこの先どうなってしまうのか、家族親類友人のことなど遠く欧州の地から落ち着かない日々を過ごした。しかし、自分にはタスクもあり、チーム員となった中国やドイツからのエンジニアらと時に議論でぶつかりながらも、国連のインシアチブ推進に向けてから作り上げる作業を進めた。30人程度の宇宙部全体のスタッフは、男女比は半々、国籍はさまざまという環境のもと、このチームではまずお互いの意見の違いを認めつつも共通点を探し、実行策を話し合うことから始めた。よく言われる「海外では発言しない」と存在していないに等しいという見方については私の居たオフィスも例外ではなく、当初はかなりモドカシイ思いもした。

初めて経験するオーストリアの首都ウィーンは、国連事務所のある区画とは異なり、欧州の伝統を守る保守の印象も色濃く残っていた。

街全体には緑があふれ、特に春から夏にかけてはサマータイムの導入もあり早朝から仕事に取りかかったあとは家族や友人らとゆったり夜までの時間を過ごすのが典型的な市民の過ごし方である。夫婦もほとんどが共働きで会社で遅くまで残業する発想は皆無だった。残業をしていると、仕事の進め方が悪いと見做されると、残業文化に慣れていた日本人はかなり焦った。

[HOW TO OVERCOME] ダイバーシティ(多様性)と エンパワーメント(湧活)

国連での勤務を通じて、JAXAでは聞き慣れない制度や考え方に会った。特に、ダイバーシティ(多様性)を尊重する考え方が徹底されていて、それを理解するための講義の受講も必須だった。自己分析では異文化への好奇心が強く適応力も高い方だと思っていたが、真に多種多様な民族と宗教が入り混じるルツボと化した職場での、文字通り「百人いたら百通り」環境には途中で音を上げたくなった。なぜならなかなか前に進まないからだ。次第によしこの力(さまざまな発想力)を合わせれば、世の中大概の事は乗り換えられるんじゃないか、と前向き思考を獲得したが、これは「石の上ならぬ」国連にも3年で得た私なりの忍耐力かなと思っている。

少し脱線したが、そのダイバーシティの考え方には、人種、宗教や文化、言語背景の違いに対する理解もさることながら、男女共同参画も当然な

から含まれる。特に国連では、男女の参画比率の徹底(50:50)も図られていた。私がいた当時、49%が女性でかつ幹部への女性登用も大変意識されており、部のボスは、マレーシア人のチャタリングな女性、マズラン、オスマン女史(元マレーシア宇宙局長官)であった。もう一つ、エンパワーメント(人が本来持っている力を引き出すこと)湧活(湧活)という言葉にも馴染んだ。

在宅勤務やシフト勤務を組み合わせて育児や介護に当たるスタッフも多く、オフィスに幼児連れで仕事に当たるワーキングママ(パパ)とその横でお絵かきや宿題をする子ども、朝7時すぎには仕事場にきて午後3時には親の介護のために帰宅する男性、ベビシッターも総動員するなど、仕事の枠の中で生活の折り合いをつけるのでなく、個々人の家庭事情のなかにうまく仕事時間を当てはめて、全体の効率化を図っているように見えた。

ある日、同僚のドイツ人から、彼女の出身組織にダイバーシティ: オフィス出身ものができたという間かされた。何でも、主たる仕事はいろいろな業種の人が毎夕のように集まりチャットすることなんて楽しいオフィスだという。どこまでが本当かは分からないが、組織運営を円滑にするためのコミュニケーションの確保(現場実態の把握)は、世界の共通課題なのかもしれない。

帰国して調査国際部で業務に携わるなかで、うれしい発見がたくさんある。これまで、仕事面で性別を意識したことも特になかったが、男女共同参画推進室が立ち上げられ、意識改革とより良い環境作りが進んでいること、また職場でも何とも言い合える雰囲気のもと共通

FOR THE FUTURE! さらに働きがいのある 環境へ

目標に向かって業務が進んでいる。JAXAが主催するアジア太平洋地域宇宙機関会議(APRSAP)の事務局として、アジア諸国の多くの関係者らとやり取りすることも多いが、多くのアジア諸国で女性が活き活きと活躍していることを実感するし、それもあつてかアジア全体が活気に満ちている。

先日(2015年12月)、インドネシアで開催されたAPRSAPの年次会合でも、ホストの宇宙機関のナンバー2(航空宇宙技術、地球観測担当)の2人の副長官は共に女性で、インドネシアの航空宇宙を牽引していた。日本とインドネシア両国のメンバーからなる我がが合同事務局チームも、1週間にわたる500名規模の会議を息の合った連携プレーでやり遂げ、目標に向かうパワーもたくさんもらった。

世界はダイナミックに変化している。今は知恵の時代とも言われるようだが、宇宙機関として新しいアイデアを創造し続けていくために、働きがいのある環境へとさらにバージョンアップしていくことを望む。それは、職場のみならず知恵を出し合いつつ組織経営のサポートとの両輪で実現していくものと思っている。



Profile

【入社年度】2000年度 【雇用形態】常勤
【勤務地】東京
【略歴】名古屋大学法学部法律学科卒業。(旧)宇宙開発事業団に入社後、2011年から国連宇宙部勤務。2014年より現職。
【出身地】三重県
【趣味】自然の中を歩くこと、カメラ、日本文化(着付けなど)

[ABOUT WORK]

民間企業での経験を経て JAXA キャリアをスタート

衛星開発プロジェクトチーム 開発員

市川 千秋

大学卒業後、国内航空宇宙メーカに入社。しかし、皆同じ作業服を着て、同じ時間に長蛇の列を作つて食堂へ行き、新人は寮に入り、その寮には門限がある、という文化が帰国直後の私にはなじみず悩んでいた頃に、在学中には応募できなかった大学試験期間中だったため、採用時期に一時帰国できず……JAXA が第二新卒募集していることを知り、すぐに応募し転職に

至った。入社後、直属の上司が海外経験のある方だった事もあり、良い意味で気負わずに JAXA キャリアを始める事ができた。上司との面談ではいつも、「好きなようにやれ! 間違つた方向に突っ走つていたら、言うてやる」と、大きな懐で育てていただいたことが幸いの私の JAXA 原点である。

また、狭い宇宙航空業界、前職の方々とお取引させていただけでなく、短時間で済んだ現場の考え方、民間企業の文化を身を以て経験できたのは、その後の JAXA での仕事に大きく役立った。

折を見て上司に相談すると、「どんな仕事でも代わりはいるけれど、家族の代わりはいないんだから、自分が番良いと思う方法を選ぶべきだ」と応援して下さった。悩んだ結果、その時は子どもを優先させていたため、打ち上げまでの半年間、週3日勤務の時間短縮勤務制度を利用させていた。週末に加える日、子どもと面と向かて過ごしたことで、子どもも成長を余裕をもつて見守ることができ非常に有意義な時間となった。

一方、仕事では会議は出勤曜日に合わせていたため、出勤日には早朝出社したり、先輩、上司にご迷惑をおかけしつつも、なんとか凌ぐことができた。時間短縮勤務制度は有効な制度だと感じた。しかし、これは何よりもプロジェクトメンバーが笑顔で応援してくれる環境があったからこそできたことであつた。本制度を利用させていたとき、チームの温かさに触れたことで、仕事で返返しをしたい、打ち上げ、運用の成功に向け全力を尽くすぞという仕事へのモチベーションにつ

なっており、すべてが私の中で良い循環に向かつた。

唯一、週3日短縮制度の残念な点として、曜日固定のためフレキシブルに対応することができないことだ。今後は仕事の予定に合せて曜日を変動できるように、検討する価値はあると思う。

その後、次女を出産し2回目の育児休業を取得。この時は家庭の事情による引越しもあり、長女は保育園を退園した。職場復帰に向け出産翌年度に長女、次女の保育園入園を申し込んだが、3歳児(長女)の途中入園は難しく、1年間待機児童として入園許可を待ち翌年度入園し、何とか仕事復帰できた。

ただ今、第三子妊娠中。春から産休育児休業を取得予定である。現在の新しい職場には、異動後間もなくお休みに入ってしまうことに理解をいただき大変感謝している。また、せつかく慣れてきた今の仕事にまたプランクが空いてしまつたことを残念に思うが、「今しかない」ともとの時間を楽しみたいと思う。今でさえ子どもと保育園への送り迎え、体調不良時の対応(姉妹は移しあうので、タイミングがずれる)など生活を回していくだけでも精一杯ではあるが、これまでも新たな分野に挑戦し、楽しんでこられたように、新しい家族を迎える事を楽しみにしつつ、次なる「家族と仕事のステージ」への一歩を突っ走りたいと思う。

ABOUT LIFE

笑顔で応援してくれる環境があつたからこそ

HOW TO OVERCOME!

自分の価値観をしっかりと持つ

FOR THE FUTURE!

次なるステージへの一歩に向けて

Profile

【入社年度】2008年

【勤務地】東京

【略歴】Purdue University Aerospace and Astroautics Engineering卒業

【家族構成】夫、子ども2人(長女5歳、次女2歳)



男女共同参画推進室の取り組みの紹介

～ 女性研究者研究活動支援事業【一般型】～

過去に実績のある取組を効果的に実施

平成25年3月時点の女性研究者の在職比率:8.7%、採用比率:13.5%

■ 具体的な取組

- A. 安心して出産・子育て・介護を行える環境
- B. 働き方の見直し、ワーク・ライフ・バランス
- C. 研究開発力・組織マネジメント力の向上
- D. 採用・登用を拡大、意識啓発
- E. ロールモデルの見える化
女子学生・院生との交流機会拡大
- F. 内外連携や相互協力ネットワークの形成

■ 実施期間終了後の取組

- ・ トップ主導による取組の継続と改善。
- ・ 自己資金の着実な確保と実施。

数値目標	達成のための方策
■採用・登用の目標	
在職比率を12%以上	採用率・離職率の改善
採用者比率を18%以上	「同等の能力では、女性優先」の方針。支援環境・制度の広報。公募方法の工夫
教授相当者の採用(現状ゼロ)	募集/審査方法の工夫
子育て・介護による離職率をゼロ	支援体制・情報の整備
■研究開発力の向上	
競争的研究資金獲得額を2倍以上	研修体系の強化、
論文投稿等の件数を1.5倍以上	メンター制度、セミナー等

その他、意識啓発、女性職員の人事制度理解の向上、人事プロセスへの参画促進など

機関全体の事業実施体制

事業所毎の特色と女性研究者のニーズと対応した支援／女性研究者の採用・上位職階での登用増加の取組／大学院博士課程に進む学生の増加の取組などを推進

